

深谷赤十字病院 消化器科

【住所】埼玉県深谷市上柴町西5丁目8番地1 【病院長】諏訪 敏一 先生 【病床数】506床

【内視鏡検査・治療総数(平成23年度)】5,249件 うち、上部内視鏡検査2,901件、下部内視鏡検査2,018件、胃ESD50件、大腸ESD13件、ERCP317件、胃瘻造設23件、胃瘻交換39件など

【内視鏡室スタッフ】医師19名(内科5名、外科9名、非常勤医師3名、呼吸器内科1名、呼吸器外科1名、看護師10名(うち内視鏡技師5名)、看護助手(洗浄担当)1名

【保有内視鏡本数】上部用20本、下部用12本、十二指腸用3本、小腸用1本、超音波内視鏡2本(コンベックス1本、ラジアル1本)



最良の医療を 常に提供できる環境をつくるのは 医師と看護師の 高いプロ意識と患者さんへの想い

埼玉県北部の広範な医療圏を担う中核病院として 最新機器を備えた内視鏡室に全面リニューアル

深谷赤十字病院は、秩父線沿線の荒川上流から群馬県境、高崎線の鴻巣までの広域にわたる、埼玉県北部地域の急性期医療を担う中核病院です。救命救急センターを中心に24時間体制の救急医療を提供し、がん診療連携拠点病院や地域医療支援病院等の多くの指定を受けて地元医師会や地域の病医院等との医療連携を進めながら地域医療に貢献しています。

同院の内視鏡室では、様々な疾患に対して迅速かつ適切な診断と治療を行うため、消化器科、内科、外科、呼吸器外科が協業して診療を行っています。平成23年1月には内視鏡室の設備が、また平成24年7月には透視室の設備が一新され、最新の内視鏡システムやスコープに全てリニューアルされました。透視室はERCPおよび気管支鏡を行う部屋と、大腸・小腸内視鏡およびイレウス管の挿入を行う部屋の2部屋に拡張され、そのうちERCP用の透視室は内視鏡画面と透視画面を同時に表示できるモニターを透視室内および操作室に各1台設置し、安全に手技を行えるよう供覧性を高めました。また、昨今話題のカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡を導入し、最新の設備で小腸検査を行えるようになりました。消化器科部長の川辺晃一先生は、「小腸内視鏡は採算性があまり良くありませんが、周辺施設にもまだ設備がないため、「深谷日赤がやらないでどこがやる」という気持ちで導入を決めました。医療は福祉の側面もあるので、対象症例が少ないから必要ないということにはなりません。地域医療を担う中核病院として、あらゆる疾患に対処できるような環境を整えました」とお話になりました。

診療科を超えた協力体制が確立された内視鏡室で 幅広い領域の最先端内視鏡治療を実施

現在消化器科は、川辺先生と平成23年4月に赴任された葛西豊高先生の2名の医師で、上部・下部・小腸内視鏡検査から先進医療である大腸ESDまで、広範かつ最先端の検査や治療を行っています。大腸ESDは保険適応になる以前の平成18年から行っていますが、川辺先生は「直腸の腫瘍で外科手術をすることで人工肛門になる、あるいは人工肛門にならなくても術後に便漏れに悩まされる患者さんがおられた状況を考え、メリットがあるだろうと考えて早期から積極的に導入しました」と導入経緯についてお話になりました。葛西先生の赴任以来、川辺先生はご自身のESDの技術と経験を葛西先生にレク

チャーされていて、その習得の速さから「今後の期待の星」だと語られました。

症例数も多く救急病院でもあるため、消化器科だけで対応していたら休む暇などないのではないか、と川辺先生に伺ってみたところ、「胆膵疾患に対するERCPは外科の新田宙先生が中心となって行うなど、当院では外科医による内視鏡低侵襲治療が確立されています。当院の内科や外科の先生方は内視鏡に造詣が深く、また診療科を超えた協力体制が整っているため、限られたスタッフでも十分対応できています」とご説明いただきました。内視鏡室の運営に関する決定事項を共有する月例の内視鏡会議や、また内科、外科ともに内視鏡室を使用するタイミングでクロスオーバーする患者の情報を交換するなど、タイムリーに必要な情報が得られる環境が整っているようです。救急対応に関しては、「現在の陣容では、昼間と同じレベルの内視鏡治療を夜間に提供するのは困難です。例えば緊急であっても、少ない人数でたまたま不慣れたスタッフが対応することになっては、患者さんの利益に反します。そのため、基本的に夜間の吐血や下血に対しては輸血でバイタルサインの回復に全力を尽くし、翌朝に内視鏡技師も揃った万全の態勢で行うことで、最善の医療を提供できるよう努めています。潰瘍性の出血は血圧が下がれば翌朝には止まっていることも多く、また胃の内容物も無くなり視野を確保した状態で内視鏡治療が行えるという利点もあります。もちろん、緊急で内視鏡を行う必要があると判断された場合は、救急病院として適切な対応ができる体制は取っています」とご説明になり、限られたマンパワーで最善の医療を提供するための工夫やお考えを聞かせていただきました。



消化器科 部長
川辺 晃一 先生



内視鏡と透視画面が同時に供覧できるモニター

▶次ページへつづく



Defining tomorrow, today
in Endoscopy.

現状と目標が「見える化」された教育システムで 内視鏡室スタッフ全員の確実なレベルアップを実現

消化器科の医師が少人数で円滑に検査や治療を行っているのは、内視鏡室のスタッフの力も大きく影響しています。内視鏡室を担当する看護師10名のうち半数は内視鏡技師の資格をもち、内視鏡業務に精通した高い知識と技術で多忙な医師をサポートしています。スタッフの教育も川辺先生が担当されていますが、モチベーションの高い仲間を増やすことを最も意識して、意見を言いやすいオープンで和やかな雰囲気の中で指導を行うよう心掛けておられるそうです。戸井田恵子看護師長は、「私たちはまず年初に前年度の内視鏡事業報告を看護部へ提出し、それを元にその年の事業計画書を作成します。看護部の方針を踏まえた計画書に沿って月ごとに具体的なアクションプランを立てますが、その中には内視鏡業務に関する院内発表などが含まれています。こうして、Plan-Do-Checkを毎月アウトプットしながら年間計画を達成するよう、タスクが課されています」と、単なる目標に留まらず、内視鏡室全体での確実なレベルアップを図るための取り組みについてご説明いただきました。さらに、「スタッフの現状把握と直近の目標を「見える化」することで、モチベーションアップに繋がっています。新しく配属になったスタッフには、“配属者マニュアル”をもとにプリセプティブ／プリセプター制度でマンツーマンのOJT(On the Job Training)研修を1年間行います。1か月ごとに評価を下し、確実に次のステップに移行する設定になっているので、1年で独り立ちできるようになります。中堅スタッフに関しては、数年前に導入された“キャリア開発ラダー認定”という院内認定制度により、1～4に分類された業務ステージで自分が今どの段階にいるのかを把握し、上司から指導を受けられる仕組みになっています」と、個々のスキルアップに関する教育方針についてもお話いただきました。戸井田師長は、「内視鏡室で行った治療の効果を最大限に高めるためには、患者さんが病棟に移った後も効果的な看護を継続的に行うことが非常に重要です。そのため、内視鏡室の業務内容を詳しく説明する院内勉強会や内視鏡室の見学会を積極的に行って、より深い理解が得られるよう努めています」とおっしゃられました。



看護師長
戸井田 恵子 さん



内視鏡洗滌室の換気システム



滅菌後の処置具は横置きで保管されている



大腸内視鏡検査の問診票

“最良の医療”という同じ目標をもつ者として 医師と看護師は車の両輪

安全で効率の良い内視鏡検査を実施するため、内視鏡室ではハードソフト両面において様々な工夫がなされています。平成22年11月に病院機能評価Ver.6の認定を受けていますが、それ以前から評価基準に準じた内視鏡洗滌室の換気システム完備や滅菌後処置具の横置きなどの徹底など、高いレベルでインフラ整備がなされています。スタンダードプリコーションの遵守はもちろん、スコープ洗浄履歴管理も徹底するとともに、感染性の疾患を持つ患者さんについては、検査室への入退室時間や検査を受けた場所などについても記録し、履歴を追えるようになっています。また、大腸検査前の前処置で使用するトイレは看護師も使用するようして常に清潔を保つなど、きめ細やかな配慮もされています。「大腸検査をスムーズに効率よく行うため、患者さんに問診票を記入していただき、すぐ検査に入れる状態かどうかを看護師が把握するようにしました。そうすることで、患者さんは人前で便の状態について説明しなくても良くなり、また前処置で時間を取られて検査が思うように進まないということもなくなりました」と話す戸井田師長。検査の流れも書面で分かりやすく説明されていて、患者さんが安心して検査を受けられる環境が整えられています。

こうした様々な工夫は、川辺先生が全面的にサポートされている技師学会への参加などにより、日々高められています。今年秋の内視鏡技師学会でも発表が予定されていて、内視鏡室の水準を全国レベルに保つよう努められています。川辺先生ご自身も学会発表や雑誌への寄稿、地域の開業医やスタッフを対象としたセミナー等の司会や演者など、多岐にわたる活動を精力的に展開されていますが、スタッフも機会が許せば先生の学会参加等と同行し、さらなる知識の向上を図っているそうです。川辺先生は、「ここでは医師も看護師も、患者さんに最良の医療を提供するという同じ目標をもつ者として、自由に意見を言い合える関係を築いています。医師と看護師は車の両輪と言えます。看護師の意識は非常に高く、内視鏡業務に精通しているので、我々医師も非常に助かっています」と言われ、戸井田師長も「内視鏡室の業務は多忙で残業も多いですが、先生と一緒に治療を行うチームの一員という実感と、またその一員として先生から信頼され頼りにされるという充実感があります。治療が終わった後、今日もまた患者さんを救ったという達成感が非常に高く、それがモチベーションを保つ理由なのではないかと思っています」とお話しになりました。

お話を伺った川辺先生、戸井田師長ともに、「自分や自分の家族がされて嫌なことを患者さんに絶対しない」ということを強調され、その考えを基礎とした活動を臨床や教育における、内視鏡室のあらゆる局面で実践されています。患者さんを真摯に思う温かい人柄と、多忙な環境でも妥協を許さない強い意志が、真の意味での質の高い医療を支えているのだと実感しました。



内視鏡室のみなさん
(写真前列右端:外科副部長 新田 宙 先生, 同左端:消化器科 葛西 豊高 先生)